

中学校における不登校・発達障害の生徒の傾向と 支援の現状についての調査研究

—関東地域961校を調査対象とした検討—

島崎由貴*・畑中愛*・橋本創一*・小林正幸**・林安紀子***・伊藤良子***・菅野敦****
大伴潔****・池田一成***・小林巖****

(2008年11月28日受理)

SHIMAZAKI, Y., HATANAKA, A., HASHIMOTO, S., KOBAYASHI, M., HAYASHI, A., ITOU, R., KANNO, A., OTOMO, K., IKEDA, K. and KOBAYASHI, I. ; Investigation of Recent Tendency of School Non-attendants and Students with Developmental Disabilities at Junior High School and Present Situation of Supports for Them.

ISSN 1349-9580

In this survey, recent tendency of school non-attendants and students with developmental disabilities and present situation of supports for them were investigated. The questionnaire was sent to 961 school nurses who work at junior high schools in Tokyo and areas near Tokyo, including Chiba, Saitama, Kanagawa, Ibaraki, Gunma, Tochigi prefectures. 266 school nurses answered the questionnaire and sent back it. The results were as follows:① In the case of supports for school non-attendants, issues many school nurse answered difficult for teachers and schools to cope with were “bully and trouble with friendship” “apathy” “issue of family” . ②In the case of supports for students with developmental disabilities, issues many school nurse answered difficult for teachers and schools to cope with were “issues of study and course after graduation” “bully and trouble with friendship”

KEY WORDS : non-attendance, developmental disability, investigating into the actual conditions

* Center for the Research and Support of Educational Practice, Tokyo Gakugei University

** Graduate School of Teacher Education, Tokyo Gakugei University

*** Center for the Research and Support of Educational Practice, Tokyo Gakugei University

**** Center for the Research and Support of Educational Practice, Tokyo Gakugei University

1. 目 的

本調査は、最近の不登校と発達障害の生徒の傾向、および、不登校と発達障害の生徒への支援の現状について調べることを目的とする。具体的には以下の通りである。なお、本調査は中学校の養護教諭を対象として行う。

- (1) 最近の不登校・別室登校の生徒と発達障害のある生徒（疑い含む）が背景に抱える問題にはどのような問題があるのかを把握する。
- (2) 不登校・別室登校の生徒と発達障害のある生徒（疑い含む）が抱える問題で、学校が対応に苦慮している問題はどのような問題であるかを調べる。ま

* 東京学芸大学教育実践研究支援センター 教育臨床研究部門

** 東京学芸大学 教職大学院

*** 東京学芸大学教育実践研究支援センター 生涯発達支援部門

**** 東京学芸大学教育実践研究支援センター 特別ニーズ教育支援部門

た、その問題に対して、学校が現状として行っている対応について調べる。

- (3) 最近の不登校・別室登校に特徴的な傾向を探る。
- (4) 発達障害のある生徒（疑い含む）が抱えている問題で多いものと、最近増加しているものを調べる。
- (5) 近年の発達障害のある生徒（疑い含む）の進路について調べる。
- (6) 不登校・別室登校の生徒と発達障害のある生徒（疑い含む）への支援に関して、スクールカウンセラーとの連携、スクールカウンセラーに期待する働き、各種支援員導入の実態、現在の各種支援員の役割について調べる。
- (7) 不登校・別室登校の生徒と発達障害のある生徒（疑い含む）への支援において、保護者の要求や苦情で学校が対応に苦慮した事例を調べる。

2. 方法

2. 1 調査対象

関東（一都六県）の公立中学校（計961校）の養護教諭。

2. 2 手続き

関東（一都六県）の公立中学校から多段抽出法によって無作為に抽出した対象校（計961校）に、アンケート用紙を郵送し、回答を直接郵送にて回収した。回答の記入に不備があるものを除き、266名の回答を集計した（有効回答率27.7%）。

2. 3 アンケート用紙の構成

不登校および別室登校に関する質問

- (1) 不登校および別室登校の生徒が背景に抱えうると思われる問題を、A～Kの計11群と、計40個の下位項目で示したもの。最近の不登校および別室登校の生徒が背景に抱えている問題としてあてはまると思うものすべてにチェックをつけてもらう。
- (2) 現在対応している不登校および別室登校の生徒が背景に抱える問題で、対応に苦慮しているものを、(1)で示したA～Kの計11群または計40個の下位項目の中から5つ選び、記入してもらう。その際、対応に苦慮している程度の高いものから順に1位～5位の順位をつけてもらう。加えて、それぞれの問題に対して学校が現状として行っている対応について自由記述で記入してもらう。
- (3) 10項目から成る、最近の不登校および別室登校の傾向についての質問項目。それぞれの項目が示す傾向が最近増えてきたと思うか否かについて、「思う」「思わない」「その他」の三択で回答を求める。

(4) 不登校および別室登校の生徒への対応について尋ねる質問項目。①スクールカウンセラーと養護教諭で連携が取れているか否かを尋ねる項目、②不登校への対応に関して、養護教諭の立場からスクールカウンセラーに期待する働きについて自由記述で回答を求める項目、③各種支援員の導入の有無を尋ねる項目、④各種支援員を導入している場合、一週間のうち何日来校しているかを尋ねる項目、⑤各種支援員を導入している場合、来校している支援員の人数を尋ねる項目、⑥現在の支援員の学校における働きについて自由記述で回答を求める項目、⑦不登校対応・対策について意見を求める項目、の計7項目から成る。

発達障害に関する質問

(5) 発達障害のある生徒が背景に抱えうると思われる問題を、A～Kの計11群と、計39個の下位項目で示したもの。最近のLD、AD/HD、広汎性発達障害など、発達障害のある生徒（疑い含む）が背景に抱えている問題としてあてはまると思うものすべてにチェックをつけてもらう。(6) 生徒が背景に抱える問題で、対応に苦慮しているものを、(5)で示したA～Kの計11群または計39個の項目の中から5つ選び、記入してもらう。その際、対応に苦慮している程度の高いものから順に1位～5位の順位をつけてもらう。加えて、それぞれの問題に対して学校が現状として行っている対応について自由記述で記入してもらう。

(7) 発達障害のある生徒（疑い含む）が抱える問題で、多いと感じるものと、最近増加していると感じるものを尋ねる質問項目。(5)で示したA～Kの計11群または計39個の下位項目の中から選び、記入してもらう。

(8) 発達障害のある生徒（疑い含む）の進路について尋ねる質問項目。ここ2～3年に在籍した生徒の卒業後の進路としてあてはまるものすべてにチェックをつけてもらう。また、その際最も多い進路にもチェックをつけてもらう。

(9) 発達障害のある生徒（疑い含む）への対応についての質問項目。①各種支援員の導入の有無を尋ねる項目、④各種支援員を導入している場合、一週間のうち何日来校しているかを尋ねる項目、⑤各種支援員を導入している場合、来校している支援員の人数を尋ねる項目、⑥現在の支援員の学校における働きについて自由記述で回答を求める項目、⑦発達障害への対応・対策について意見を求める項目、の計7項目から成る。

保護者対応に関する質問

(10) 不登校や発達障害のある生徒の保護者による要求や苦情で、学校が対応に困った事例があった場合、その事例について自由記述で記入を求める。

3. 結 果

3. 1 不登校

3. 1. 1 最近の不登校の生徒が背景に抱えている問題

質問1では、不登校の背景として存在しうと思われる問題を提示し、そのなかで、最近の不登校および別室登校の生徒が抱えている問題としてあてはまると思うものすべてにチェックをつけてもらった。提示した問題は、計40項目あり、タイプごとにA～Kの計10の群に分かれていたが、この質問では、群ではなく下位項目で回答を求めた。

集計の結果、回答者全体の（266名）の8割以上がチェックをつけたものは「ソーシャルスキルが乏しい（80.5%）」であった。7割以上がチェックをつけたものは「心理的虐待・身体的虐待・性的虐待・ネグレクトがある（あった）（79.3%）」「友人関係が希薄である（77.8%）」「友人関係上のトラブル・いじめがあった（77.4%）」「怠学がある（73.7%）」「親の道德心の欠如または親が子ども

もの問題を放置している（70.3%）」であり、この順で多くチェックがつけられた。6割以上がチェックをつけたものは、「学校生活において全般的に消極的（65.4%）」「発熱・頭痛・腹痛・吐き気・ぜん息・円形脱毛・過呼吸症候群・起立性調節障害などの症状があり、背景に心理的因子があると思われる（心身症）（63.5%）」「親や教師に言われて登校するが続かない（62.8%）」であった。以上の結果を表1に示す。

この結果からは、不登校の背景に、ソーシャルスキルの乏しさ、友人関係の希薄さ、友人関係上のトラブル・いじめなど、友人関係に関わる問題が存在するケースが多いことが推察される。また、虐待の問題が不登校の背景として存在するとした回答者の割合も高く、不登校の背景として存在する可能性のある問題全体の中でも、「心理的虐待・身体的虐待・性的虐待・ネグレクトがある（あった）」とする回答者は「ソーシャルスキルが乏しい」に次いで2番目に多く、回答者全体の79.3%にも上った。

表1 最近の不登校の生徒が背景に抱えている各問題 回答者全体の6割以上がチェックした項目（N=266）

順 位	問題の項目	チェックされた総数	%
1 位	ソーシャルスキルが乏しい	214	80.5%
2 位	心理的虐待・身体的虐待・性的虐待・ネグレクトがある（あった）	211	79.3%
3 位	友人関係が希薄である	207	77.8%
4 位	友人関係上のトラブル・いじめがあった	206	77.4%
5 位	怠学がある	196	73.7%
6 位	親の道德心の欠如または親が子どもの問題を放置している	187	70.3%
7 位	学校生活において全般的に消極的である	174	65.4%
8 位	発熱・頭痛・腹痛・吐き気・ぜん息・円形脱毛・過呼吸症候群・起立性調節障害などの症状があり、背景に心理的因子があると思われる（心身症）	169	63.5%
9 位	親や教師に言われて登校するが長続きしない	167	62.8%

3. 1. 2 不登校の背景にあり対応に苦慮している問題

質問2では、不登校および別室登校の生徒が背景に抱える問題で、対応に苦慮しているものを、質問1で提示した問題の中から5つ選択してもらった。なお、質問1で提示した問題は、計40項目からなり、問題のタイプごとにA～Kの計10の群に分かれていたが、この質問への回答は、1～40の下位項目で答えることも、A～Kの群で答えることも可とした。また、選択した5つの問題は、対応に苦慮している程度の高いものから1位～5位の順位をつけてもらった。集計は、1位～5位の各順位ごとに行った。A～Kの群で回答されたものについては群で集計を行い、1～40の下位項目で回答されたものについては、下位項目での集計だけでなく、その下位項目が属する上位の群にも加算し、集計を行った。結果を表2～3に示す。なお、表には各順位において選択された割合が

最も高かった群および項目のみを載せた。群で集計した結果が表2であり、下位項目で集計した結果が表3である。

結果をみると、群で集計した結果1位～5位のほぼすべての順位で高い割合を占めた問題は、「Aいじめや友人関係の問題」「D無気力である」「G家族・家庭問題」であった。学校現場では、不登校の生徒が抱える問題については、これら3つのタイプの問題への対応に苦慮していることが示唆された。また、これら3つのタイプの群の他「J著しい情緒不安定・心身症の問題」も2位と5位で高い割合を占め、対応に苦慮する問題となっていることが示唆された。

下位項目で集計した結果、「親の道德心の欠如または親が子どもの問題を放置している」は1位と2位の内訳で最も高い割合を、3位においても2番目に高い割合を占め、4位以下では高い割合を占めていない。この結果

から、学校現場において「親の道德心の欠如または親が子どもの問題を放置している」という問題が、対応に苦慮する程度が高い問題として認識されていることがうかがわれた。この他に上位と下位の内訳で大きな違いは見受けられなかった。「親の道德心の欠如または親が子どもの問題を放置している」以外で、1位～5位の多くの順位で高い割合を示した下位項目は、「統合失調症・気分障害・不安障害・身体表現性障害・解離性障害・摂食障害など、診断名のつく精神疾患を抱えている（疑い含む）」と「発熱・頭痛・腹痛・吐き気・ぜん息・円形脱毛・過呼吸症候群・起立性調節障害などの症状があり、背景に心理的因子があると思われる（心身症）」であった。

これら3つの下位項目は、家庭に関わる問題や医者やカウンセラーなど専門家による対応が必要な問題であり、教師だけで対応することが難しいという点で共通しているように思われる。なお、対応に苦慮する問題1位の内訳（項目版）で、3番目に高い割合を占めた問題に「家族に精神疾患を抱えた人がいる」があるが、これも生徒本人の問題ではないこと、また医療による支援が必要であることから、学校という場で生徒と関わる立場にある教師にとっては、問題そのものに直接的に対応していくことは難しい問題であるように思われる。このような難しさが比較的少ない、つまり、教師が直接対応できると思われる問題で、対応に苦慮する問題の1位から5位の内訳（項目版）で上位3項目の中に入っている問題は、「ソーシャルスキルが乏しい」「クラス内の人間関係の悪さ、クラスの雰囲気への嫌悪・恐怖からクラスに入れない」「学校生活に意義を見出せないなど、自分の主義主張により登校しない」「友人関係が希薄である」

「怠学がある」であった。これらの項目をみると、対人関係に関わる問題が多いが、いじめなどの具体的なトラブルがあったという項目よりも、友人関係が希薄で、ソーシャルスキルが乏しいという、そもそも友人関係を築き、関係を継続することが苦手であることが推察される項目や、クラス内の人間関係の悪さや雰囲気というある意味曖昧なものへの嫌悪・恐怖からクラスに入れないという項目が入っている点が特徴的である。このような問題への対応の困難としては、例えば、具体的なトラブルに比べ、解決に向けるためには長期にわたって根気強く関わる必要があるということがあるかもしれない。

ところで、これらの項目のうち、「ソーシャルスキルが乏しい」「友人関係が希薄である」「怠学がある」の3つは、最近の不登校および別室登校の生徒が抱えている問題として、回答者全体の7割以上がチェックをつけた項目であり、「クラス内の人間関係の悪さ、クラスの雰囲気への嫌悪・恐怖からクラスに入れない」も、最近の不登校および別室登校の生徒が抱えている問題として、回答者全体の6割弱がチェックをつけた項目である。つまり、教師の多くがこれらの問題を抱える不登校の生徒がいると認識しているとともに、対人関係については、この種の問題への対応に苦慮する人が多いことが示唆された。一方、最近の不登校および別室登校の生徒が抱えている問題にあてはまるものとして「学校生活に意義を見出せないなど、自分の主義主張により登校しない」にチェックをつけたのは、回答者全体の3.5割ほどにとどまっている。他の項目に比べこのような不登校は割合としては低いが、このような背景をもつ不登校のケースでの対応には苦慮するということかもしれない。

表2 不登校の背景にある問題で対応に苦慮するもの1～5位それぞれの内訳で最も高い割合を占めたもの（群版）

順位	順位対応に苦慮している問題（群）	チェック総数	%	N
1位	G群 家族・家庭問題	74	28.0%	264
2位	G群 家族・家庭問題	44	19.6%	224
3位	A群 いじめや友人関係の問題	39	21.8%	179
4位	A群 いじめや友人関係の問題	28	21.5%	130
5位	D群 無気力である	18	18.2%	99

表3 不登校の背景にある問題で対応に苦慮するもの1～5位それぞれの内訳で最も高い割合を占めたもの（項目版）

順位	順位対応に苦慮している問題（項目）	総数	%	N
1位	親の道德心の欠如または親が子どもの問題を放置している	24	15.1%	159
2位	親の道德心の欠如または親が子どもの問題を放置している	14	11.1%	126
3位	発熱・頭痛・腹痛・吐き気・ぜん息・円形脱毛・過呼吸症候群・起立性調節障害などの症状があり、背景に心理的因子があると思われる（心身症）	11	10.6%	104
4位	学校生活に意義を見出せないなど、自分の主義主張により登校しない。	7	9.6%	73
5位	発熱・頭痛・腹痛・吐き気・ぜん息・円形脱毛・過呼吸症候群・起立性調節障害などの症状があり、背景に心理的因子があると思われる（心身症）	6	10.9%	55

3. 1. 3 不登校の生徒が背景に抱える各問題に対して学校が現状として行っている対応

質問2では、不登校および別室登校の生徒が抱えている問題で対応に苦慮しているものを選択してもらうことに加え、その問題に対し、学校が現状として行っている対応について自由記述で記入を求めた。A～Kの問題群

ごとにKJ法を行い、それぞれの問題に対して現状として学校でなされている対応について検討した。

まず、各回答者の記述に含まれる対応一つ一つを分け、抽出を行った。そして、似ていると思われる内容をまとめて小カテゴリーを作成し、さらに関連性のあるものをまとめ、大カテゴリーとした。問題群別に小カテゴリー、大カテゴリーにまとめた結果を表4に示す。

表4 背景に抱えている問題のタイプ別 不登校生徒に対して学校が現状行っている対応についての自由記述質問紙のKJ法結果

	大カテゴリー	小カテゴリー
いじめや友人関係の問題	トラブルのあった生徒と話す・話し合うことで解決を図る (16.2%)	トラブルのあった生徒の話を聞く (6.0%) トラブルのあった生徒の双方で話し合いの場を設ける (3.4%) 本人と密に連絡をとる (3.4%) 個別の相談を行う (3.4%)
	指導を行う (11.3%)	直接指導を行う (2.6%) 学校・学年・クラス単位で講演会や研修会を行いトラブル防止を図る (4.9%) ソーシャルスキルの獲得を意識した関わりを行う (3.8%)
	家庭と連携して対応する (11.3%)	家庭との連絡を密にする (8.3%) 保護者との面談を行う (3.0%)
	本人が出来る範囲で参加させる (9.4%)	別室登校を活用して対応する (7.9%) 本人のペースで登校させる (1.5%)
	教師が対人関係を気に掛け調整する (9.0%)	対人関係がうまくいくよう、教師が対人関係の調整、雰囲気づくりを行う (6.8%) クラス編成時、人間関係に配慮する (1.9%) 教師が声掛け等を行いトラブル防止に努める (0.8%)
	複数の職員が連携して対応する (4.5%) 本人とコミュニケーションをとる (3.8%)	家庭訪問を行う (2.6%) 本人と連絡をとる (1.1%)
	外部機関と連携して対応する (2.3%)	
遅れがある。または境界線知能である	家庭と連携する (9.4%)	保護者と協力して対応を図る (4.9%) 家庭との連絡を密にする (4.5%)
	外部機関と連携して対応する (4.9%) 学習の支援を行う (4.5%)	
	本人とコミュニケーションをとる (3.0%)	個別の学習指導を行う (3.4%) その子に合った指導を工夫する (1.1%)
	教職員が障害への理解を高め、対応を話し合う (1.9%)	本人との連絡を密にする (1.5%) 家庭訪問を行う (1.5%) 校内委員会で対応を話し合う (1.1%) 職員が障害理解に努める (0.8%)
ある反社会的な言動がある	本人への働きかけを行う (15.8%)	本人との関係づくりに努める (6.8%) 家庭訪問を行う (4.5%) 本人に直接指導する (3.8%) 行事をきっかけに登校を促す (0.8%)
	家庭と連携して対応する (11.3%)	家庭と密に連絡をとる (10.2%) 保護者との話し合いの場をもつ (1.1%)
	関係諸機関と連携をとる (5.3%) 校内で連携をして対応する (3.8%)	
	本人と個別に関わる (36.5%)	本人との関係づくりに努める (10.9%) 本人と連絡をとる (7.9%) 個別に指導をする (6.8%) 家庭訪問を行う (6.0%) 個別の相談を行う (0.8%) 個別の学習支援を行う (4.1%)
無気力である	家庭と連携して対応する (13.5%)	家庭に連絡をとる (11.7%) 保護者と協力して対応を図る (1.9%)
	本人が出来る範囲で参加させる (7.1%)	別室登校を活用して対応する (5.6%) 本人のペースで参加させる (1.5%)
	本人の意欲を引き出す工夫をする(友人関係・学習面) (3.0%)	周囲とのコミュニケーションを促進させる関わりをする (1.9%) 自信をつけさせる関わりをする (1.1%)
	複数の職員で連携して対応する (1.9%)	
	出来る範囲で本人と関わる (2.6%)	関係の良い教師が対応する (1.5%) 家庭訪問を行う (0.8%) 本人の話を聞く (0.4%)
教師との関係の問題	家庭と連携する (1.1%)	保護者と個別の相談を行う (0.8%) 保護者に他機関を紹介する (0.4%)
	本人とコミュニケーションをとる (5.3%)	本人と話をする (4.1%) 家庭訪問を行う (1.1%)
	複数の教職員が連携して対応する (1.1%) 家庭と連携して対応する (1.1%)	

	大カテゴリー	小カテゴリー
家族・家庭問題	家庭との連携を試みる (42.1%)	家庭と連絡をとる (21.8%) 家庭訪問を行う (7.5%) 家庭と連携を試みるが、なかなか連絡がとれない (6.0%) 保護者と話し合う (5.3%) 保護者に子どもへの対応の改善をお願いする (1.5%)
	本人とコミュニケーションをとる (13.5%)	本人に連絡をとる (6.0%) 本人と話をする (5.6%) 家庭訪問を行う (1.9%)
	各種関係機関と連携する (9.4%)	各種相談機関と連携する (6.8%) 地域と連携する (1.1%) 各種相談機関を紹介する (1.5%)
	個別に対応する (6.8%)	個別の指導をする (2.6%) 別室登校を活用して対応する (1.9%) 生徒の自立を促す支援をする (1.1%) 個別の相談を実施する (1.1%)
	複数の職員で対応する (1.9%)	
	日常生活の支援をする (1.5%)	
虐待の問題	家庭との連携を試みる (3.0%)	家庭と連絡をとる (1.1%) 個別の相談を行う (1.1%) 家庭訪問を行う (0.8%)
	関係機関との連携 (2.3%)	
	日常生活のサポート (1.1%)	
	複数の職員で対応する (0.8%)	
精神疾患 (疑い含む)	家庭と連携して関わる (8.3%)	保護者と話をする (4.9%) 家庭と連絡をとる (3.4%) 別室登校を利用して対応する (3.4%) 本人の状態に配慮して個別の対応をする (2.6%) 個別の相談をする (1.1%)
	個別の対応をする (7.1%)	
	関係機関と連携する (6.4%)	関係機関と連絡をとり対応する (4.5%) 医療機関へつなげる (1.9%)
	教職員間で連携をとる (3.4%)	
	本人とコミュニケーションをとる (1.9%)	
著しい情緒不安定・心身症の問題	本人と個別の関わりをもつ (21.4%)	本人との関係づくりに努める (1.1%) 本人と話をする (0.8%) 本人との関係づくりに努める (6.4%) 本人の話をよく聞く (5.6%) 個別の相談を行う (4.1%) 家庭訪問を行う (2.3%) 本人の心が安定するような関わりを心掛ける (1.9%) 指導を行う (1.1%)
	家庭と連携して対応する (14.7%)	家庭との連絡を密にする (10.5%) 保護者と協力して対応を図る (4.1%)
	本人の出来る範囲で参加させる (11.3%)	別室登校で対応する (5.3%) 無理のない範囲で参加を促す (3.0%) 学校内における安心できる場所の確保 (1.5%) 本人の状態理解に努める (1.5%)
	教職員間で連携して対応する (7.5%)	教職員間で連携して対応する (6.8%) 関係の良い教職員が本人との関係づくりに努める (0.8%)
	関係機関と連携する (5.6%)	関係機関と連携する (2.6%) 関係機関へつなげる (3.0%)

() 内は全回答者266名に占める割合

3. 1. 4 最近の不登校に増えてきた傾向

質問3では、不登校や別室登校の状態像を10項目提示し、最近の不登校および別室登校でそのような傾向が増えてきたと思うか否かを、「思う」「思わない」「その他」の三択で回答を求めた。結果を表5に示す。表は、「思う」の割合が高いもの、つまり、最近増えてきたという回答が多かった項目から順に並べている。最近の不登校に増えてきたと思うという回答が回答者全体の6割を超えた項目は、「家族および保護者自身も福祉的・医療的支援が必要である (85.3%)」「普段はクラスに入れないが、修学旅行や遠足には参加する (69.8%)」「同級生とはあまり話さないが、先生とはよく話す (64.5%)」「クラスには入れないが、塾には通っている (62.3%)」で

あった。家族・家庭に関わる問題は、最近の不登校の背景にある問題としても回答者の多くがチェックをつけており (3.1.1 参照)、また、不登校の背景にあり対応に苦慮する問題として挙げられた割合も高かった (3.1.2 参照)。これらの結果から、不登校の背景に家族・家庭に関わる問題が存在することが多く、また、最近増えてきており、その対応に苦慮することが多いことがうかがえる。一方、増えてきたと思わないという回答が回答者全体の6割を超えた項目は、「授業時はクラスに入れないが、朝礼・終礼には参加する (83.8%)」の1項目であった。

表5 最近の不登校・別室登校に増加している傾向 集計結果（“最近増えてきたと思う”の割合が高い項目順）

質問項目	増えてきたと思う	増えてきたと思わない	その他	合計
10.家族および保護者自身も福祉的・医療的支援が必要である	221 (85.3%)	16 (6.2%)	22 (8.5%)	259
2.普段はクラスに入れないが、修学旅行や遠足には参加する	180 (69.8%)	56 (21.7%)	22 (8.5%)	258
8.同級生とはあまり話さないが、先生とはよく話す	169 (64.5%)	65 (24.8%)	28 (10.7%)	262
1.クラスには入れないが、塾には通っている	157 (62.3%)	65 (25.8%)	30 (11.9%)	252
9.不登校の子どもへの対応について、親が非協力的で連携がとれない	128 (50.0%)	77 (30.1%)	51 (19.9%)	256
5.普段はクラスには入れないが、中間・期末のテストには参加する	123 (47.9%)	102 (39.7%)	32 (12.5%)	257
3.授業時はクラスに入れないが、部活には来る	108 (42.2%)	118 (46.1%)	30 (11.7%)	256
6.クラスには入れないが、クラスの友人とは問題なく付き合っている	103 (40.4%)	116 (45.5%)	36 (14.1%)	255
7.クラスには入れないが、放課後になると先生と話しに登校する	81 (31.6%)	125 (48.8%)	50 (19.5%)	256
4.授業時はクラスに入れないが、朝礼・終礼には参加する	16 (6.3%)	212 (83.8%)	25 (9.9%)	253

■は回答者全体の6割以上の回答が得られた箇所

3. 2 発達障害

3. 2. 1 最近の発達障害のある生徒が背景に抱える問題

質問5では、発達障害の背景として存在しうと思われる問題を提示し、そのなかで、最近のLD、AD/HD、広汎性発達障害等、発達障害のある生徒（疑い含む）が抱えている問題としてあてはまると思うものすべてにチェックをつけてもらった。提示した問題は、計39項目であり、タイプごとにA～Kの計10の群に分かれていたが、この質問では、群ではなく下位項目で回答を求めた。

集計の結果、回答者全体の（266名）の7割以上がチェックをつけたものは「友人関係上のトラブル・いじめがあった」「集中して授業に参加しない（居眠りや授業と関係のない活動をする、離席など）」「ソーシャルスキルが乏しい」であり、この順で多くチェックがつけられ

た。6割以上がチェックをつけたものは、「全般的に学習についていけず、学業不振の状態にある」「親が障害理解・受容をできない、および問題を放置している」「作業を最後まで終わらせることができず、課題提出ができない。提出を忘れてしまう」「ノートをとることができない。不正確だったり間違ったりしている」であった。以上の結果を表6に示す。

この結果からは、発達障害（疑い含む）の生徒が抱える問題には、やはり学習面における問題が多いこと、友人関係においては、具体的なトラブルやいじめの問題が起きることが多く、ソーシャルスキルの面で弱さがあると認識されていることが推察される。また、親の障害理解・受容の問題や、親による本人の問題への対応の不足などの問題も、教師に認識されていることがうかがわれる。

表6 最近の発達障害のある生徒が背景に抱えている問題 回答者全体の6割以上がチェックした項目（N＝266）

順位	発達障害のある生徒が背景に抱えている問題	総数	%
1位	友人関係上のトラブル・いじめがあった	192	72.2%
2位	集中して授業に参加しない(居眠りや授業と関係のない活動をする、離席など)	191	71.8%
3位	ソーシャルスキルが乏しい	187	70.3%
4位	全般的に学習についていけず、学業不振の状態である	178	66.9%
5位	親が障害理解・受容をできない、および問題を放置している	168	63.2%
6位	課題を終えられず課題提出ができない。提出を忘れてしまう	163	61.3%
7位	ノートをとることができない。不正確だったり間違ったりしている	160	60.2%

3. 2. 2 発達障害の背景にあり対応に苦慮している問題

質問6では、現在在籍する発達障害の生徒が背景に抱える問題で、対応に苦慮しているものを、1で提示し

た問題の中から5つ選択してもらった。なお、1で提示した問題は、計39項目からなり、問題のタイプごとにA～Kの計10の群に分かれていたが、この質問への回答は、1～39の下位項目で答えることも、A～Kの群で答える

ことも可とした。また、選択した5つの問題は、対応に苦慮している程度の高いものから1位～5位の順位をつけてもらった。集計は、1位から5位の順位ごとに行った。A～Kの群で回答されたものについては群で集計をし、1～39の下位項目で回答されたものについては、下位項目での集計だけでなく、その下位項目が属する上位の群にも加算し、集計を行った。結果を表7～8に示す。なお、表には各順位において選択された割合が最も高かった群および項目のみを示した。群で集計した結果が表7であり、下位項目で集計した結果が表8である。

群で集計した結果をみると、1位から5位のうち多くの順位で高い割合を占めた問題は、「C学習や進路の問題」「Aいじめや友人関係の問題」であった。この他、「F家族・家庭問題」「D無気力」「J不登校」「B反社会的な言動がある」も複数の順位で高い割合を占めた。「C学習や進路の問題」と「Aいじめや友人関係の問題」の2群は、それぞれの下位項目が、質問5で、「最近のLD、AD/HD、広汎性発達障害等、発達障害のある生徒（疑い含む）が抱えている問題としてあてはまる問題」として挙げられた割合も高い。このことから、発達障害の生徒（疑い含む）が、「C学習や進路の問題」や「Aいじめや友人関係の問題」の問題を抱えていることが多いこと、そして、これらの問題は対応に苦慮する程度が高い問題であると認識されていることがうかがわれた。

対応に苦慮している問題の上位と下位で占めた問題の内容の違いとしては、「F家族・家庭問題」が、対応に苦慮する問題（群版）の上位（1位と2位）の内訳においてのみ高い割合を占め、3位以下では高い割合を占

めなかった点が挙げられる。同様の傾向が先に述べた不登校の調査の結果においても得られており、「F家族・家庭問題」が、学校現場で対応に苦慮する程度の高い問題として認識されていることがうかがわれる。この点以外は、順位によって、占める問題の内容に大きな違いはなかった。

下位項目で集計した結果をみると、「親が障害理解・受容をできない。または親が子供の問題を放置している」が1位、2位、4位で最も高い割合を占める問題、5位においても3番目に高い割合を占める問題となっており、本調査で挙げた問題（下位項目）の中では、この問題が発達障害の背景にある問題で最も対応に苦慮するものとなっていることがうかがわれた。この他、「友人関係上のトラブル・いじめがあった」「集中して授業に参加しない（居眠りや授業と関係のない活動をする、離席など）」「全般的に学習についていけず、学業不振の状態である」も多くの順位で高い割合を占めた。

このうち、「親が障害理解・受容をできない。または親が子供の問題を放置している」は「F家族・家庭問題」の群に、「友人関係上のトラブル・いじめがあった」は「Aいじめや友人関係の問題」の群に、そして、「集中して授業に参加しない（居眠りや授業と関係のない活動をする、離席など）」と「全般的に学習についていけず、学業不振の状態である」は、「C学習や進路の問題」の群に含まれる問題である。これら、「F家族・家庭問題」「Aいじめや友人関係の問題」「C学習や進路の問題」の3群は、いずれも、対応に苦慮する問題の群での集計において、多くの順位で高い割合を占めた問題である。

表7 発達障害のある生徒(疑い含む)が抱える問題で対応に苦慮するもの
1～5位それぞれの内訳で最も高い割合を占めたもの（群版）

順位	対応に苦慮する問題（群）	総数	%	N
1位	C群 学習や進路の問題	72	31.6%	228
2位	A群 いじめや友人関係の問題	43	26.1%	165
3位	C群 学習や進路の問題	36	30.0%	120
4位	A群 いじめや友人関係の問題	28	21.7%	129
5位	D群 無気力である	18	18.4%	98

表8 発達障害のある生徒(疑い含む)が抱える問題で対応に苦慮するもの1～5位それぞれの内訳で最も高い割合を占めたもの（項目版）

順位	順位対応に苦慮している問題（項目）	総数	%	N
1位	親が障害理解・受容をできない。または子どもの問題を放置している	32	26.9%	199
2位	全般的に学習についていけず、学業不振の状態である	10	11.0%	91
	親が障害理解・受容をできない。または子どもの問題を放置している	10	11.0%	91
3位	友人関係上のトラブル・いじめがあった	8	12.7%	63
4位	親が障害理解・受容をできない。または子どもの問題を放置している	9	21.4%	42
5位	感情の浮き沈みが激しい	4	10.8%	37
	不登校・登校渋り・保健室登校・相談室登校などがみられる	4	10.8%	37

3. 2. 3 発達障害のある生徒が抱える各問題に対して学校が現状として行っている対応

質問6では、発達障害のある生徒（疑い含む）が抱えている問題で対応に苦慮しているものを選択してもらうことに加え、その問題に対し、学校が現状として行っている対応について自由記述で記入を求めた。A～Kの問題群ごとにKJ法を行い、それぞれの問題に対して現状

として学校でなされている対応について検討した。

まず、各回答者の記述に含まれる対応一つ一つを分け、抽出を行った。そして、似ていると思われる内容をまとめて小カテゴリーを作成し、さらに関連性のあるものをまとめ、大カテゴリーとした。問題群別に大カテゴリー、小カテゴリーにまとめた結果を表9に示す。

表9 背景に抱えている問題のタイプ別 発達障害のある生徒（疑い含む）に対して学校が現状行っている対応についての自由記述質問紙のKJ法結果

	大カテゴリー	小カテゴリー
いじめや友人関係の問題	指導を行う (19.2%)	トラブルのあった生徒に指導を行う (10.9%) ソーシャルスキル獲得を意識した関わりをする (6.4%) 学年やクラスで全体に指導をする (1.9%)
	本人の話を聞く・話しあう (15.4%)	トラブルのあった生徒の双方で話し合いの場を設ける (10.5%) トラブルのあった生徒の話を聞き指導する (4.1%) トラブルの仲裁をする (0.8%)
	家庭と連携する (7.5%)	家庭との連絡を密にする (6.0%) 保護者と協力して対応を図る (1.5%)
	教職員間で連携して対応する (5.3%)	教職員間で対応を話し合う (3.0%) 複数の教員で生徒に関わる (2.3%)
	教職員が対人関係を気に掛けフォローする (4.9%)	教職員が様子を気に掛け、声掛け・フォローをする (2.6%) 対人関係がうまくいこう、教師が対人関係の調整、雰囲気づくりを行う (2.3%)
	個別の対応を行う (4.5%)	別室で個別対応する (3.8%) 別室登校を利用して関わる (0.8%)
	他の生徒の障害に対する理解を高める (3.4%)	
	学習の支援を行う (2.3%)	学習をサポートする (1.1%) 通級での指導を行う (1.1%)
	外部機関と連携して関わる (1.1%)	
	個別に対応する (13.2%)	直接指導する (7.5%) 落ち着くことのできるような対応を心がける (1.5%) トラブルのあった生徒と話す・話し合う (1.1%) よく話を聞く (0.8%) 本人との関係づくりに努める (0.8%) 個別の学習支援を行う (0.8%) 個別の相談をする (0.8%)
反社会的な言動がある	家庭と連携する (7.1%)	保護者に学校における生徒の現状を伝える (4.9%) 保護者と協力して対応を図る (2.3%)
	校内で連携して対応する (2.6%)	教職員間で連携して対応する (1.5%) 複数の教員で関わる (1.1%)
	外部機関と連携して対応する (2.6%)	
	個別の学習支援を行う (36.1%) 個別に学習指導をする (21.4%)	支援員が学習をサポートする (5.6%) 学習環境・学習内容・指示の仕方などを工夫する (5.3%) 通級での学習指導を行う (3.8%) 個別の対応をする (13.9%) 声掛けをする・励ますなどの関わりをする (4.5%) 別室で対応する (4.1%) 生徒本人と話す・話し合う (3.8%) 個別の指導を行う(逸脱行動など) (1.5%)
学習や進路の問題	家庭と連携する (13.2%)	家庭との連絡を密にする (9.8%) 家庭と協力して対応を図る (3.4%)
	教職員間で連携する (5.3%)	複数の教員で対応する (3.4%) 教職員間で対応を話し合う (1.9%)
	外部機関と連携して対応する (1.9%)	
	他の生徒の障害への理解を高める関わり (1.1%)	
	個別の対応をする (3.8%)	本人が出来る範囲で参加させる (1.1%) 個別の学習支援を行う (1.1%) 本人と話を (1.1%) 個別の進路指導を行う (0.4%)
無気力	家庭と連携して対応する (3.0%)	
	校内で連携して対応する (0.8%)	
教師との関係の問題	個別の対応をする (2.6%)	個別に指導する (1.5%) 個別の相談を行う (1.1%)
	家庭と連携する (26.3%)	保護者と話し合う (14.3%) 保護者に本人の学校での現状を話す (6.0%) SC が親との面談を行う (6.0%) 外部機関と連携する (2.6%)
家族・家庭問題	個別に関わる (2.6%)	個別の指導を行う (1.5%) 生徒本人と個別の相談を行う (1.1%) 校内で連携する (2.3%)

	大カテゴリー	小カテゴリー
問題 虐待の	外部機関と連携して対応する (1.5%)	
	家庭と関わる (1.5%)	
(疑い含む) 精神疾患	外部機関と連携して関わる (1.9%)	
	家庭と連携して対応する (1.9%)	
	個別の対応をする (1.5%)	本人の特性をふまえた対応をする (0.8%) 別室を利用して関わる (0.8%)
	校内で連携して関わる (0.8%)	
著しい情緒不安定・心身症の問題	個別の対応をする (6.8%)	別室で落ち着かせる (2.6%) 本人と話しをする (1.9%) 個別の相談を行う (1.1%) 個別に指導をする (1.1%)
	校内で連携して関わる (2.3%)	
	外部機関と連携する (2.3%)	
	家庭と連携して関わる (1.9%)	
不登校	家庭と連携して対応する	(6.4%) 家庭との連絡を密にする (3.4%) 家庭と協力して対応を図る (3.0%)
	本人ができる形で登校させる (2.6%)	別室登校を利用する (1.9%) 適応指導教室を利用 (0.8%)
	教職員間で対応を話し合う (2.3%)	
	関係機関と連携して関わる (1.9%)	
	本人とコミュニケーションをとる (1.5%)	本人と話をする (0.8%) 本人と連絡をとる (0.8%)

3. 2. 4 発達障害の生徒が抱える問題で多いと感じるもの・最近増加していると感じるもの

質問7では、発達障害の生徒が抱える問題で、多いと感じるものと、最近増加していると感じるものを、質問5で示した問題から選択してもらった（複数回答可）。この回答についても、2と同様、1～39の下位項目で答えることも、上位のA～Kの群で答えることも可とした。上位3位までの結果を表10～13に示す。

発達障害の生徒が抱える問題で多いと感じるもの（群版）では、「C学習や進路の問題」「Aいじめや友人関係の問題」「F家族・家庭問題」が上位3位を占めたが、これらの群は、対応に苦慮する問題の群での集計においても、多くの順位で高い割合を占めた問題である。

発達障害の生徒が抱える問題で多いと感じるもの（項目版）で上位3位を占めたのは、「ソーシャルスキルが乏しい」「友人関係上のトラブル・いじめがあった」「友人関係が希薄である。友人をつくる意欲に乏しい」であり、いずれも対人関係に関わる問題であった。

発達障害の生徒が抱える問題で最近増加していると感じるもの（群版）で上位3位を占めたのは、「F家族・家庭問題」「Aいじめや友人関係の問題」「C学習や進路の問題」であった。これら3つの群は、先に述べた発達障害の生徒が抱える問題で多いと感じるもの（群版）でも上位3位を占めており、また、対応に苦慮する問題の群

での集計においても、多くの順位で高い割合を占めている。このことから、「F家族・家庭問題」「Aいじめや友人関係の問題」「C学習や進路の問題」は、発達障害の生徒が背景に抱える問題となっていることが多いと同時に最近増えており、対応にも苦慮する問題である、ということがうかがわれる。

発達障害の生徒が抱える問題で最近増加していると感じるもの（項目版）で上位3位を占めたのは、「親が障害理解・受容をできない。または子どもの問題を放置している」「集中して授業に参加しない（居眠りや授業と関係のない活動をする、離席など）」「全般的に授業についていけず、学業不振の状態である」の3項目であった。これらは、「F家族・家庭問題」に含まれる項目と、「C学習や進路の問題」に含まれる項目である。先に述べたように、これらの群は、発達障害の生徒が抱える問題で最近増加していると感じるもの（群版）でも上位3群に入っている。このことから、発達障害の生徒が抱える問題として「F家族・家庭問題」や「C学習や進路の問題」の問題が最近増えており、例えば、「親が障害理解・受容をできない。または子どもの問題を放置している」「集中して授業に参加しない（居眠りや授業と関係のない活動をする、離席など）」「全般的に授業についていけず、学業不振の状態である」といった問題が増加しているということがうかがえる。

表10 発達障害の生徒が抱える問題で多いと感じるもの（群）上位3群

順位	多いと感じる問題（項目）	総数	%
1位	C 学習や進路の問題	116	30.8%
2位	A いじめや友人関係の問題	111	29.4%
3位	F 家族・家庭問題	50	13.3%

表11 発達障害の生徒が抱える問題で多いと感じるもの(項目)上位3項目

順位	多いと感じる問題(項目)	総数	%
1位	ソーシャルスキルが乏しい	26	15.7%
2位	友人関係上のトラブル・いじめがあった	21	12.7%
3位	友人関係が希薄である。友人をつくる意欲に乏しい	15	9.0%

表12 発達障害の生徒が抱える問題で最近増加していると感じるもの(群)上位3群

順位	最近増加していると感じる問題(群)	総数	%
1位	F 家族・家庭問題	51	19.7%
2位	A いじめや友人関係の問題	43	16.6%
3位	C 学習や進路の問題	41	15.8%

表13 発達障害の生徒が抱える問題で最近増加していると感じるもの(項目)上位3項目

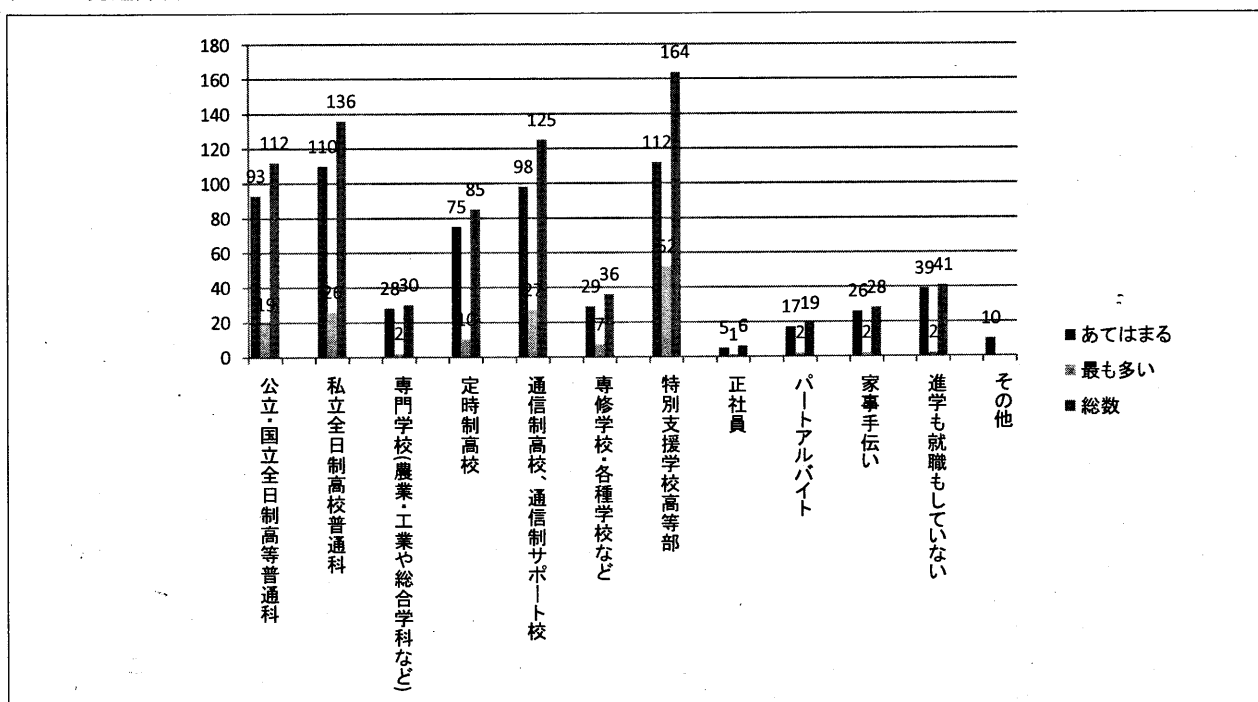
順位	最近増加していると感じる問題(項目)	総数	%
1位	親が障害理解・受容をできない。または子どもの問題を放置している	16	15.7%
2位	集中して授業に参加しない(居眠りや授業と関係のない活動をする、離席など)	6	5.9%
3位	全般的に授業についていけず、学業不振の状態である	6	5.9%

3. 2. 5 発達障害のある生徒の進路

質問8では発達障害のある生徒(疑い含む)の進路について、12の項目を提示し、ここ2～3年に在籍した発達障害のある生徒にあてはまるものすべてと、もっとも多かった進路にチェックをつけてもらった。集計の結果を表14に示す。“あてはまる”で多かった上位3つは「特別支援学校高等部」「私立・国立全日制高等普通科」「通信制高校、通信制サポート校」で、この順に回答数が多かった。それぞれ、“あてはまる”の回答数全体の

17.4%、17.1%、15.3%を占めた。“最も多い”で多かった上位3つは「特別支援学校高等部」「通信制高校、通信制サポート校」「私立・国立全日制高等普通科」で、この順に回答数が多かった。それぞれ、“最も多い”の回答数全体の34.7%、18.0%、17.3%を占めた。以上をみると、順位に違いはあるものの、“あてはまる”と“最も多い”で上位3つに入っている進路先は同じであり、全体をみても、両方で回答の分布に大きな違いは見られなかった。

表14 発達障害のある生徒(疑い含む)のここ2～3年の進路先(数値はチェックされた数)



3. 3 不登校・別室登校の生徒および発達障害のある生徒（疑い含む）への支援の現状

アンケート調査では、中学校における、不登校・別室登校の生徒および発達障害のある生徒（疑い含む）への支援の現状に関する質問も設定した（質問4、10）。以下に集計の結果を示す。

3. 3. 1 スクールカウンセラーと養護教諭との連携

「スクールカウンセラーと養護教諭で連携は取れていると思いますか」の質問項目に、「はい」「いいえ」「その他」の三択で回答を求めた。その結果、「はい」82%、「いいえ」8%、「その他」10%と、連携がとれていると回答した割合が8割を超えた（N=260）。

3. 3. 2 不登校への対応においてスクールカウンセラーに期待すること

不登校への対応において、養護教諭の立場から、スクールカウンセラーにどのような働きを期待するかについて、自由記述で回答を求めた。集計の結果、スクールカウンセラーに期待する働きとして多くの回答者が挙げたものは、「生徒へのカウンセリング（49.2%）」、「保護者へのカウンセリング（35.0%）」、「情報提供（30.8%）」、「対応についてのアドバイス（20.3%）」、「外部機関の紹介（8.3%）」であった（（）内は全回答者266名に占める割合）。情報提供については、発達障害に関する知識や、守秘義務に反しない範囲での情報などの提供を希望する記述があった。

3. 3. 3 支援員導入の実態

不登校・別室登校の生徒への支援、発達障害のある生徒（疑い含む）への支援それぞれに関して、「学習指導補助員、メンタルフレンドなどの各種支援員は導入されていますか」との質問項目を設定した。回答は「はい」「いいえ」「その他」の三択で求めた。その結果、不登校・別室登校の生徒への支援に関しては、「はい」44%、「いいえ」53%、「その他」3%であり、各種支援員を導入している学校も4割を超えたが、導入していない学校のほうが多かった（N=260）。発達障害のある生徒（疑い含む）への支援に関しては、「はい」36%、「いいえ」62%、「その他」2%であり、各種支援員を導入していない学校が約6割であり、導入している学校は全体の4割に届かなかった（N=244）。

3. 3. 4 支援員の来校日数

3.3.3で「はい」と答えた回答者に、不登校・別室登校の生徒への支援、発達障害のある生徒（疑い含む）

への支援それぞれに関して、支援員が週何日来校しているかをたずねた。不登校・別室登校の生徒への支援に関しては、5日32%、4日19%、1日18%、2日15%、3日11%、3.5日2%、0.5日1%、1.5日1%、2.5日1%であり（N=114）、もっとも多かったのは、週5日来校している学校であった。発達障害のある生徒（疑い含む）への支援に関しては、5日50%、3日19%、1日11%、2日11%、4日7%、1.5日2%であり（N=84）、週5日来校している学校が最も多く、5割を占めた。

3. 3. 5 支援員の来校人数

3.3.3で「はい」と答えた回答者に、不登校・別室登校の生徒への支援、発達障害のある生徒（疑い含む）への支援それぞれに関して、支援員が何名来校しているかをたずねた。不登校・別室登校の生徒への支援に関しては、1名68%、2名17%、4名7%、3名6%、1～2名1%、5～6名1%であり（N=115）、1名の学校が圧倒的に多く、約7割を占めた。発達障害のある生徒（疑い含む）への支援に関しても、1名68%、2名14%、4名7%、3名6%、1～2名3%、5名1%、5～6名1%であり（N=82）、不登校・別室登校の生徒への支援における場合同様、1名の支援員が来校している学校が最も多く、約7割を占めた。

3. 3. 6 現在の支援員の働きの内容

3.3.3で「はい」と答えた回答者に、現在、発達障害のある生徒への支援において、支援員が学校でどのような働きをしているかについて、自由記述で回答を求めた。集計の結果、学校での支援員の働きとして多く挙げられたものは、「教室で学習支援を行う（16.2%）」、「別室で学習支援を行う（9%）」、「生徒の話し相手になる（6.8%）」であった（（）内は全回答者266名に占める割合）。

3. 3. 7 現在の支援員の働きの内容

3.3.3で「はい」と答えた回答者に、現在、不登校生徒への支援において、支援員が学校でどのような働きをしているかについて、自由記述で回答を求めた。集計の結果、学校での支援員の働きとして多く挙げられたものは「別室で生徒の相談を受ける・話し相手になる（20.7%）」、「別室で学習支援を行う（16.2%）」であった（（）内は全回答者266名に占める割合）。

3. 4 保護者対応について

本調査では、不登校や発達障害のある生徒の保護者

による要求や苦情で、学校が対応に困った事例があった場合、その事例について、自由記述で記入を求めた。その結果、99名（回答者全体の37.2%）の回答者が、自身の勤務校がそのような要求や苦情を経験したと回答した。KJ法によって作成された大カテゴリーのうち、記述した回答者の割合が高かったものは、「無理難題を要求する（15.0%）」と「理不尽なクレームをつける（10.9%）」であった。「無理難題を要求する（15.0%）」には、「学校がすべきとは思えない対応や無理難題を要求する（9.0%）」「夜遅い時間帯や長時間にわたる電話対応および面談、勤務時間外の学習指導などの個別対応、突然の来校による面談等を要求する（3.8%）」「担任の交代やクラス替えを要求する（2.3%）」の3つの小カテゴリーが含まれる。「理不尽なクレームをつける（10.9%）」には、「学校や教師のせいではないことを学校や教師のせいであるとしてクレームをつけたり、問題の解決を求める（7.5%）」「自分の子どもの言うことを鵜呑みにしてクレームをつける（3.4%）」の2つの小カテゴリーが含まれる（（）内は全回答者266名に占める割合）。

「学校や教師のせいではないことを学校や教師のせいであるとしてクレームをつけたり、問題の解決を求める（7.5%）」の中には、保護者が子どもの障害（疑い含む）について認識していないために学校側と共通理解が得られず、学校や教師の対応のみが問題とされてしまう、と

いうものが多かった。本研究で得られた、発達障害のある生徒（疑い含む）が抱える問題で対応に苦慮するものについての結果では、「親が障害理解・受容ができない。または子どもの問題を放置している」という項目が高い割合を占めたが（表8参照）、これらの結果を踏まえると、保護者の障害理解は、専門家による支援の重要なポイントとなるように思われる。

3. 5 登校・別室登校、発達障害への支援における、家庭への支援のニーズについて

本調査の結果を概観すると、家族・家庭に関わる問題が、多くの質問への回答で、不登校や発達障害の生徒の背景として、あるいは、最近増加している問題として、上位を占めていることがわかる（表15～18）。本調査は、公立中学校の養護教諭のみを対象者としており、他の立場からは別の見方ができるかもしれないが、本調査の結果、学校で日々子供たちの様子を眺め、関わっている養護教諭の立場からは、家族・家庭に関わる問題が、不登校や発達障害の生徒が抱える問題の背景として存在する場合が多く、最近、その傾向が顕著であると認識されていることがうかがえる。このことから、不登校・別室登校、発達障害のある生徒への支援においては、家庭に対する支援のニーズも高まっているように思われる。

表15 最近の不登校の生徒が背景に抱えている問題（項目版）表1より抜粋

順位	問題の項目	総数	%
2位	心理的虐待・身体的虐待・性的虐待・ネグレクトがある（あった）	211	79.3%
6位	親の道德心の欠如または親が子どもの問題を放置している	187	70.3%

表16 最近の不登校・別室登校に増加している傾向 集計結果 表5より抜粋

順位	質問項目	増えてきたと思う	増えてきたと思わない	その他	合計
1位	10. 家族および保護者自身も福祉的・医療的支援が必要である	221 (85.3%)	16 (6.2%)	22 (8.5%)	259

表17 発達障害の生徒が抱える問題で最近増加していると感じるもの（群）表12より抜粋

順位	最近増加していると感じる問題（群）	総数	%
1位	F 家族・家庭問題	51	19.7%

表18 発達障害の生徒が抱える問題で最近増加していると感じるもの（項目）表13より抜粋

順位	最近増加していると感じる問題（群）	総数	%
1位	親が障害理解・受容ができない。または子どもの問題を放置している	16	15.7%

参考文献

- 1) 角田 智恵美・佐藤 ひかり・五十嵐 裕子：不登校児童生徒への養護教諭の関わり方：現職養護教諭を対象とした質問紙調査を中心として，鳴門生徒指導研究, 16, pp. 16-28, 2006.
- 2) 高橋智・谷田悦男・横谷祐輔：発達障害を有する児童生徒の学校不適応の実態と教育支援の課題：都内小・中学校情緒障害通級指導学級調査から（32-【A】初等・中等教育, 2 一般研究発表II, 発表要旨），日本教育学会大会研究発表要項, 66, pp. 276-277, 2007.
- 3) 田村みずほ：高機能広汎性発達障害に関する実態調査，日本児童青年精神医学会総会, 2001.
- 4) 保坂亨：不登校の実態調査－類型分類の観点から－，千葉大学教育学部研究紀要. I, 教育科学編, 47, pp. 7-18, 1999.
- 5) 山本 奨：不登校状態に有効な教師による支援方法，日本教育心理学会, 55 (1), pp. 60-71, 2007.